

## 詩編78編1～8節

## マルコによる福音書14章50～52節

●決して風化させてはいけない事、語り伝え続けなければならない事があります。太平洋戦争や東日本大震災、原発事故などです。何故語り伝えなければいけないのか？それは人間が同じような差別や戦争、事件や事故を繰り返してしまうからです。

楠原佑介さんは「この地名が危ない」という本の中で、地球上で最も災害の多い日本で先祖がその土地土地に「ここは危ない」というメッセージとして地名を付けてきたが、目先の利益優先の安易な地名変更政策のせいで古い地名が次々に消えている問題を指摘しておられます。

●聖書の内容は元々、先祖の伝承を口頭で大切に語り伝えたものでした。今日の詩編78編は「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう…主が成し遂げられた驚くべき御業を」とあります。詩人は何を語り継ごうと言っているのでしょうか。この詩編にはイスラエル民族の歴史が語られていますが、明確に2つの事柄が示されています。一つは「神の前で罪を犯す人間の姿」。そしてもう一つが、「その罪にもかかわらず、人間を赦し憐れまれる神さまの姿」です。この詩編には「人間の背信」と「神の憐れみと恵み」が、シーソーのように追いつ追われつ歌われています。聖書の本当に素晴らしい点は、自らの民族の失敗や汚点を、隠さず後世に伝えているところなのです。

●福音書にもイエス様が捕えられた時、弟子達が皆逃げ出してしまう、ある若者が素敵な亜麻布の服を捨てて裸で逃げってしまったという話が記されています。この若者はこの福音書を書いた著者マルコの姿ではないかとも言われています。この短い記事もまた、人間はいざというときに弱く、罪深い存在であり、そんな存在をも独り子であるイエス様を十字架に架けて神様は赦して下さったのだというメッセージを伝えているのです。

●私たち人類は歴史において繰り返し、同じ罪深さを露呈します。悲しみや後悔、絶望の只中であっては、涙と悲しみしかありませんが、時を得てその困難な時にも神の憐れみが注がれ、イエス様が寄り添って下さっていたのだということに気づきを与えられ、私たちの弱さや失敗から学んだ知恵と神の偉大さを後世に語り伝えていく私たちでありたい、そう願います。